

語ずつ分野番号と分野内の通し番号がついている。用語説明はなく、注釈欄には別称などが必要に応じて記されている。分野と用語数は次のとおりである。総論(216)、植物形態学(595)、植物解剖学(449)、植物胚胎学(261)、藻類学(134)、真菌学(395)、地衣学(77)、苔類植物学(40)、植物生理学(374)、植物化学(170)、植物生態学(333)、植物地理学(94)、古植物学(73)、胞粉学(93)。植物学の現況からみて、生理や化学の用語が、他にくらべてずいぶん少ないようと思うし、実際、新しい用語はのっていない。遺伝学という分野は見当たらない。これが中国の現状だとすれば、ちょっと首をひねりたくなる。わが国と同様、新展開している分野の用語は消化する暇なく、原語にそのまま漢字を当てて苦労しているようだ。この点わが国の片カナというのは便利な文字だと思う。一方、現在は使われていない用語もかなり含まれている。巻末に華英索引と英華索引がある。とくにおすすめする文献ではないが、日本での用語を選ぶときに、文字の使い方の参考にはなる。例えば、*abortion* 敗育、*telome* 頂枝、*lenticel* 皮孔、*zygote* 合子、*abundance* 多度、*vicarious species* 替代種、*tetrad* 四合花粉。*shoot* と言う用語は議論が多くて決めかねたと序文にある。

(金井弘夫)

□亘理俊次：芝棟—屋根の花園を訪ねて— 302pp. 1991. 八坂書房. ¥4,200 (+送料).

著者によれば、芝棟は民家建築に普通な草葺屋根の棟の一形式で、植物を植え、根を張らせて棟の固めとする手法の総称である。本書は、趣深い芝棟の姿にひかれた著者が、研究の傍ら半世紀近い歳月をかけて日本各地を探訪して得た資料を基礎に集大成されたものである。

本書は2部からなる。第1部は総括篇で、芝棟研究の発端と本書のあらまし、草葺屋根の葺草、屋根の花園に見られる植物、芝棟の衰退と絶滅、芝置屋根の5章からなる。第2部、芝棟探訪篇では日本中部を中心に全国の芝棟の実際が記されている。

いまでは芝棟は草葺屋根の大幅な衰退により、希少な存在となってしまい、本書はかつて各地に

普通に見られた芝棟の記録となってしまった。その意味で本書は、他に類書のない芝棟についての学術上の貴重な資料である。

本書を読んで、芝棟に用いる種が多数あったことに目を見張った。また、地域ごとに共通性が高いことも面白い。ベンケイソウ科植物は著者も芝棟に多い植物として、特別に取り上げているが、メノマンネングサやイワレンゲの急速な減少は芝棟の衰退に関連があるだろう。中国では、飛び火防止にイワレンゲ属植物を屋根に植えると古い記録にあるが、芝棟でも同属は普通な植物のひとつであったことが読み取れる。

著者の長年にわたる探訪の記録は、すぐれた植物紀行文になっている。自然と調和したありし日の日本の村々の様子をそこに見るおもいがする。

(大場秀章)

□矢島道子：地球からの手紙 171pp. 1992. 國際書院. ¥1,200 (+送料)

本書は植物を直接に取り扱ってはいないが、自然史を中等教育のレベルでどのように取り上げるかで示唆に富むところが多いので紹介した。著者は、1981年に東京大学大学院で学位取得後、成徳短大附属高校で教育に携わっている。

著者が研究対称としたミジンコを中心にすえ、分類と系統進化、それが研究されてきた課程、標本の意義、さらにはミジンコの生態などが体験を基礎に簡素かつ平易に、高校生に語りかけるように書き表されている。その記述は文字で漫画の画面を追うようだ。

著者はまた将来研究に志す若者を切望するが、誘惑するだけでなく、「研究とか調査とかはある程度単純な繰り返しを含みます。決してすぐにおもしろい結果がえられるとは限りません。」という指摘も忘れていない。理科教育あるいは初等教育に携わる読者に推薦したい。

(大場秀章)

□Corner, E. J. H. : *Botanical monkeys* 55 pp. 1992. The Pentland Press Ltd., Durham. £12.5(+5.25, postage).

著者Cornerさんは、日本でも著名な熱帯植物などの研究者であり、本書はCornerさんが書い

たがゆえに、興味深い記録になっている。表題のとおり本書は、Cornerさんの植物採集をしたブタオザルたちの記録である。

ケンブリッジ大学を卒業してすぐの1929年2月にシンガポール植物園の副園長として赴任したCornerさんは、前任者のT. F. Chippを継いでマレー半島のキノコ相を調査することが特別な任務だった。しかし、好奇心の特別旺盛な彼は、熱帯林の樹木に興味を抱きキノコの端境期に採集を始める。どうやって採集するか？ココナツの採取を見て、このブタオザルを使ってみてはどうかと考える。

1937年にタイとの国境に近いTumpatの原住民から28マレードルで若いブタオザルを買う。赤を意味するメラという名を彼は与える。本書は、Cornerさんとメラとの出会いの日々から始まる。飼育の記録、どうやって採集するか。しかし、最愛のメラは、300種もの樹木を採集してまもなく死んでしまう。しかし、彼はあきらめない。ブチ、ジャンブル、メラ2世を原住民から買う。再び飼育と教育が始まる。

本書には、直接植物についての話しが登場しない。しかし、本書はどうやって熱帯林の樹木をCornerさんが採集したか、また彼が動物に向ける目を知るうえで興味深い。彼一流のユーモアが随所に登場する。植物だけでなく動物好きの読者、Cornerさんや熱帯の自然に興味をもつ方に推薦したい。

(大場秀章)

□Brummitt, R.K. (complied) : *Vascular plant families and genera* 804 pp. 1992. Royal Botanic Gardens, Kew. £24.00.

Willisの*A Dictionary of Flowering Plants and Ferns*(1973)は、科名、属名を調べるのに便利であった。Willisの本は長い歴史をもち、1973年のものは8版である。その5版や6版では科名・属名だけでなく、普通な英名まで採録されていたし、短い解説や図もあった。Willisと同じCambridge University Pressから1987年にでた、D. J. Mabberleyの*The Plant-book*は主要な属に解説があり、Willisの旧版に近いかたちになった。これは世界の植物の便覧としてたいへん便利だと思う。

Willisの新版の方は長らく絶版であったが、この系統に沿うのが、標題のものといえる。これには、キュー植物園で採用されている世界の維管束植物の属とその科のリストで、顕花植物では8つの分類体系での分類上の位置の比較を伴う、という内容の副題がある。副題にあるとおり、これはキュー植物園で採用している分類体系を一本としたという性格が強い。従って、Willisよりも正名と見なす属名と異名とする属名が識別しやすいように書体を変えて印刷されている。

現在世界中で植物情報のデータベース化が進められている。キューでもはやくからこれに取り組んできた。本書その成果でもあり、その発端は1974年に遡ると前書きに記されている。私の想像を加えれば、現在進行中の属名のCurrent useの選択ともこの出版は無関係ではないであろう。

それはともかくとして、本書はWillisの新版に代わる科名・属名の辞書としてたいへん便利である。

(大場秀章)